

地域医療を考えるペガサス情報誌

つなばさ

Pegasus
Tsubasa

25

2007年夏号
平成19年7月発行第7巻第1号(通巻25号)

special
1

人を育て、人とともに、 地域医療の明日を創る。

第1弾 —— 看護師教育にかける思い ——

special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。



Tsubasa

special
1



Pegasus

人を育て、人とともに、 地域医療の明日を創る。

第1弾 ― 看護師教育にかける思い ―

医療の基本は、人と人との心のつながり。豊かな人間性と専門性を備えた職員を育てることは、病院にとって永遠の課題とも言えます。

また、地域医療全体に視野を広げたとき、地域の医療従事者への研修、さらに、地域に住む人々に、医療・病院・健康への意識を高めていただくことも重要な課題になります。

医療法人ペガサスではこれまで自己改革を推し進めるなかで、

職員教育に力を注ぐとともに、地域全体を見つめた人材教育や啓蒙活動にも積極的に取り組んでいます。そんなペガサスの「人を育て、人とともに歩む」姿勢を、今回からシリーズで紹介します。

第一弾は、馬場記念病院看護部です。専門職業人を育てるために、

OJT（オンザジョブトレーニング）を基本に、集団教育また個別指導など、いくつかの手法を用いて、やりがいをもって長く働けるよう支援しています。

そこには、年月をかけて構築されてきた完成度の高い教育体系と、

看護部みんなで後輩を育てていこうとする並々ならぬ熱意が秘められています。

「看護部・教育委員会の取り組み」

与える教育ではなく、 一人ひとりが「気づく」教育の実践。

馬場記念病院の看護部では、看護師の教育を主導する教育委員会が組織されている。教育委員会では看護師の段階別に教育プログラムの内容を練り、年間を通じて多様な研修を行っている。そのなかから、卒後1年目研修の事例を追ってみた。

医療安全をテーマにした 入職3カ月目の研修。

「今日は、医療安全について学んでいきます。みなさん、主体的に取り組んでいきましょう」。今年の6月12日、教育委員会の吉田礼子（北館2階統括師長）はやや緊張した面持ちで集まった新人看護師たちを前に、こう話しかけた。場所は、馬場記念病院の隣にあるペガサスクリニック2階の会議室。午前10時30分、卒後1年目看護師の約半数が集まり、「集合研修」の一つである入職3カ月目の研修が始まろうとしていた。ちなみに、卒後1年目看護師の残りのメンバーは、3日後に研修を受ける

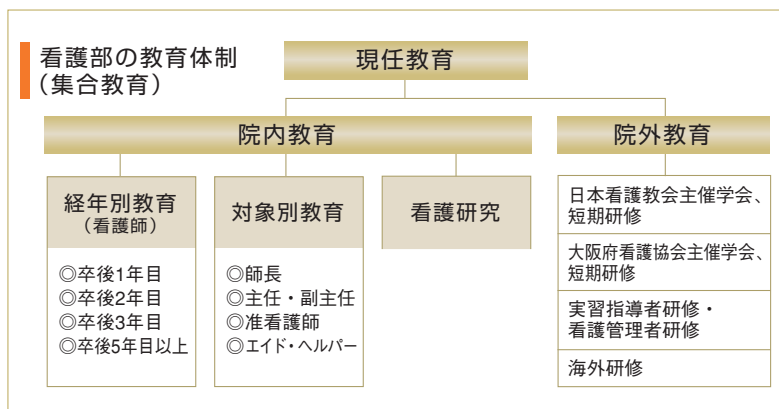
ことになっている。

最初に、医療安全管理者の資格を持ち、吉田とともに教育委員会を率いる高橋睦子（北館4階師長）が、誤薬についての事故、誤薬の要因、注意すべき薬などを具体的に解説し、誤薬事例についてグループワークが行われた。次は、臨床工学士による「輸液ポンプの使用方の解説と実技」。このような専門職による講義は、今年から始まった新しい試みである。より現場の最新情報を伝え、実践的な理論と技術を学ぶことが目標だ。お昼休みをはさんで、各自が「入職3カ月を振り返って」思うことを1分間スピーチにまとめて発表。つづいて、「専門職業人について考えてみよう！」というテーマで、事例を用いたグループワークが行われた。

このグループワークはたっぷり2時間かけて行われた。4人ごとのグループに分かれ、活発に意見を交換し、ときに頭を抱え込みながら、意見をまとめていった。最後にいくつかの考察を発表する受講者たち。その様子を、看護部長、看護部副部長、師長らが見守っていた。

各自が主体的に考える、 グループワーク。

グループワークの狙いはどこにあるのか。吉田は「それぞれが主体的に考え、学ぶこと」と言う。予め用意された正解はない。さまざまな視点から考え、看護の洞察力や判断力を深めることが目的なのだ。発表



馬場記念病院・看護部の教育の特色

集合教育と個別教育を連携させ、
一人前の看護師へと導いています。

看護部 副部長 正本恵子

看護部 副部長 三野直人



当院の看護部の教育は、集合教育と個別教育の両方が緻密に連携しているのが大きな特色です。

集合教育では、集合研修を教育委員会が中心となって運営していますが、ディスカッションを豊富に取り入れ、受け身ではなく自発的に学べる場になっています。更に集合研修だけで終わることなく、現場と研修が連動して知識と技術を学んでいけるように工夫を重ねています。このほか当院では、院外研修も積極的に取り入れています。「チャンスがあれば、どんどん活かしなさい」というのが、副院長や看護部長の考え方。意欲さえあれば学

べることは限りなく、認定看護師や専門看護師への道も今後大きく開けていくと思います。

個別教育ではプリセプター制度のほか、当院独自の「チェックリスト」を活用しています。卒後1年目の看護師が、自分の成長度を自覚できるとともに、教える側も個々のレベルに応じた教育を着実に行うことができます。また、指導者が、自分が新人の時に使ったチェックリストを見直すことにより、当時の不安感や悩みを振り返ることができ、新人の気持ちに共感しながら精神的にフォローできるという利点もあります。

後、吉田は各チームの発表を評価した上で、少し違う視点を示唆し、ゆつくりとわかりやすく語りかけていった。さらに、看護部長の櫻井能武子が総評として、「大切なのは、患者さまをどう見つめるか」であることを優

しく説いた。「忘れてならないのは、その人が今まで生きてきた歴史があり、その人の思いがあるということなんです」。こうして夕方5時、研修が終了。受講した看護師たちは、明らかに入

室時とは違う、晴れやかな表情をしていた。その一人、北館2階A病棟所属の天野由希は「ふだんは仕事を覚えるだけで精一杯。でも、入職した頃に思っていた看護の心を思い出し、再確認できました」と満足げに語った。また、北館3階病棟の梅原由衣は「久しぶりに同期のみんなとゆつくり話せて、とても良かったです」と言い、仲間と連れ立って会議室を後にした。

吉田は「同期が集まることも、実は研修の隠れた狙いのひとつなんです。お互いに悩みを打ち明け、励まし合えますから」と言う。

**より良い研修を求め、
毎年改良を加えていく。**

3カ月研修の準備が始まったのは、





ペガサスの看護01

急性期看護＜救急外来＞の現場から

常に緊急を要する救急の現場。
早く、正確な判断力が
問われます。

馬場記念病院 救急外来
看護師長 紀ノ岡真弓



救急外来では、24時間体制で患者さまを受け入れています。1カ月の搬送数は500～600件ほど。搬送されるケースで多いのは、脳疾患や心臓疾患、事故などの患者さまです。搬送中に救急隊から受けた連絡と、ときには患者さまの実際の状態が違ふことがあります。そんなときは医師か、私たち看護師がすぐに判断し、別の診療科の医師を呼び出したり、検査の手配をすることになります。いついかなる時も、早く、正確な判断力が問われますね。

日々、緊迫した状況下で素早く行動することが求められます。でも、その分自分自身で判断して動くことも多いから、とても勉強になりますね。

20日ほど前である。卒後1年目の研修は、年間4回。「専門職業人としての自覚を養うこと。看護の基礎を身につけ、安全に看護実践ができるようになること」が目標である。初回打ち合わせでは吉田、高橋が中心となり、研修のテーマや講義、デモンストレーション、グループワークの内容を検討していった。メンバーはそれから研修当日まで、何度となく打ち合わせを重ね、プログラムの詳細を詰めていった。企画書やプログラムなどを作成したのは、入職3

年目・南館1階病棟に勤める西田莉奈である。西田は今年初めて教育委員会に加わり、卒後1年目研修を担当することになった。「今までは研修を受ける側でしたが、反対の立場になり、こういう狙いで研修が企画されていたのか、と感心しました。納得するまで内容にこだわる吉田師長の姿勢がとても勉強になります」と言う。

なるほど手を抜こうと思えば、去年のプログラムをそのまま踏襲することもできる。しかし、教育委員会の鉄則は「去年より良い研修を」。研修後



必ず受講者の声を集め、その反省点を踏まえて毎年、改良されているのだ。
看護部ではこうした集合研修が、経年別、対象別にきめ細かく行われる（P.3の図参照）。ここまで緻密な研修を実施している病院は、それほど多くないだろう。そのすべてを企画・運営しているのが、各病棟から選任された看護師（教育委員）たち。そして、吉田は高橋とともに、教育委員会の全研修を実践していく、言わばリーダーの役目をしている。

ペガサスの看護02

急性期看護<ICU・SCU>の現場から

患者さまの集中治療と、ご家族の精神的フォローに努めます。

馬場記念病院 北館2階A病棟（ICU・SCU）
看護師長 一森雅美



ICU、SCUでは重症な患者さまを集中的に治療・看護するとともに、急な入院で動揺されているご家族を精神的に支えるよう努めています。患者さまの全身管理を行うため、高度な医療・看護知識はもちろん、小さな異常に素早く気づく観察力や判断力が問われますね。

患者さまの命を預かるという責任の重さを実感しますが、その分、返ってくるものも多く、急性期看護に精通した看護師としてキャリアを積めると思います。

重症だった患者さまが、元気に退院されるのが喜びです。

馬場記念病院 北館2階A病棟（SCU）
山崎 彩



重症度の高い患者さまが多く、最初は何をしたらいいのかわからず右往左往するばかりでした。でも、プリセプターがじっくり教えてくださったおかげで、2年目を迎えた今、自分一人ですることがどんどん増えていきました。忙しさに追われる毎日ですが、元気になって退院していく患者さまを見ると疲れも吹き飛びますね。

手探りでノウハウを 積んできた教育委員会。

今年で10年目を迎える教育委員会。設立のきっかけは、教育に熱心な当時の看護部長、和田裕子（現馬場記念病院副院長）の呼びかけだった。和田は大まかな枠組みは指示したが、具体的な方法論は委員の手に委ねた。そのため当初は、全く手探りの状態

だったという。この10年間で、目に見える成果はあったのだろうか。その問いに吉田は少し考えてからこう言った。「一人ひとりが主体的に考えて看護を行うようになりましたね。専門職業人としての意識が上がり、看護の質が向上したと実感しています」。

各自が看護を主体的に考えて行う。そのレベルまで引き上げるには「研修と現場の連動」が重要なポイントとなる。そのため受講する看護師の所属長（師長）は時間の許す限り、研修に顔を出し、研修後も現場でどのように導けば、モチベーションを維持できるかを検討、研修を踏まえた指導が現場で行われていく。教育委員会だけでなく、看護部全員で教育に参加するという意識は高い。

さらに、「馬場記念病院の教育は与えたり、押しつけるものではない」と、吉田は強調する。「どうすれば相手に“気づいてもらえるか”、その手助けをするのが私たちの役目です」。

「個別教育の取り組み」

日々の業務を通じ、一人ひとりの
気持ちを支え、やりがいを育てていく。

集合教育と並んで力を注いでいるのが、日々の業務のなかで行われる「個別教育」だ。
レベルに応じた集合教育と、上司や先輩から個々に指導される実践教育。
その両方のアプローチにより、看護師一人ひとりを着実に専門職業人へと導いているのである。
ここでは吉田の一日の業務を追いつながら、
馬場記念病院で行われている日常的な教育を追ってみた。

師長自ら「手本」を示す 病室の環境整備。

馬場記念病院の北館は急性期病棟である。そのなかで、吉田が統括する北館2階はA病棟（ICU、SCU）とB病棟（脳神経外科の一般病棟）からなる。最も緊迫した空気の漂う急性期医療の最前線だ。吉田はこの病棟の全体を統括するとともに、北館2階B病棟の師長を兼務している。

吉田の朝は、ベッドコントロールから始まる。ICUが満床の状態では、救急患者さまが搬送され

てきても、即座に受け入れられないからだ。各病棟の師長と連絡を取り合い、適切な指示を出していく。その後の夜勤から日勤への申し送りが終わると、48床ある北館2階B病棟のラウンド（病棟巡回）である。患者さま一人ひとりに「おはようございます」と挨拶し、気になる病状を確認して回る。ここで吉田が特に目を光らせるのが、環境整備だという。「患者さまの周囲が散らかっていたり、汚れていては、きちんと看護しているとは言えません。病室が乱雑では、万一の時もスムーズに対応できませんから」というのが吉田の考えだ。

ペガサスの看護03 回復期看護の現場から

ケアプランに沿ったケアで、
自宅療養への橋渡しを
しています。

馬場記念病院 南館1階病棟
（回復期リハビリテーション病棟）



太良木 順子

回復期リハビリテーション病棟は自宅療養を目標に、積極的にリハビリテーションと治療を行う病棟です。患者さまが入院してきたら、まず看護師がご家族やご本人と話し合い、ケアプランを作成します。その後はケアプランに基づき、医師や理学療法士、介護スタッフなどのチームでリハビリテーションのお手伝いをしたり、さまざまなケアを行います。回復期病棟は比較的ゆっくりした時間の流れのなかで、患者さま中心の看護に専念できる環境です。チーム医療を担う一員としてしっかり役目を果たしながら、患者さまが一日も早く自宅復帰されることをめざしています。



ペガサスの看護04 療養期看護の現場から

じっくりと時間をかけて、
一人ひとりの患者さまと
向き合います。

ペガサスリハビリテーション病院
3階病棟
(介護療養病棟)

西川 純



療養期病棟は療養生活を通し、少しずつ在宅療養へと橋渡ししていく病棟で、レクリエーションやリハビリテーションにも力を注いでいます。私たち看護師は一人ひとりの患者さまと向き合い、少しでも自立できるように看護を行っています。オムツを使っている患者さまの排泄の時間を調べ、その時間にトイレに座ってもらうようにするなど、じっくりと時間をかけて看護に取り組めます。

私と同じように子どもを持っている看護師が多いこともあって、お互いに助け合っているのも、とても働きやすいですね。

ポジティブな思考で
部下たちの悩みを
包み込む。

ラウンドを終え、病棟管理日誌をチェックしていると、エルダー（プリセプターの支援者）から「ちよっといいですか」と声をかけられた。少し相談があるという。「プリセプター（先輩看護師）がプリセプティ（卒後1年目看護師）と性格が合わないような気がする、それと前に、技術的

な質問に答えられないことがあって、それ以来、頼りにされていらないような気がする。そこで私は、”質問された時に、一緒に調べるとか、私たちに聞いても良かったよ”と言っておいたんですけれど、馬場記念病院では、先輩看護師がマンツーマンで新人看護師を指導する「プリセプター制度」を導入している。その二人をめぐる相談ごとだった。

エルダーの話を最後まで聞いた後、吉田はこんなふうに助言を始



ペガサスの看護05 在宅看護の現場から

人間として、
豊かに、逞しく
成長できるステージです。

ペガサス訪問看護ステーション
統括所長 寺下久代



ペガサス訪問看護ステーションは地域の方々などに支えられ、今年12周年を迎えました。訪問看護師たちは4ステーションを拠点に、待ってくださっているご利用者・ご家族を訪問させていただいています。退院し、住み慣れた家で生活されることで、多くの方が生き生きとした笑顔を取り戻されます。在宅看護に携り、出会い・「時」の大切などと、生きる意味や死生観を学び、人間として豊かに、逞しく成長させていただきます。病院と在宅、特に看護師間の連携を深め、ご利用者・ご家族の方々が安心して在宅療養が送れるよう、医療の専門家として幅広く支援していきたいと考えています。

めた。「性格が合わないと感じる」ということは、それだけ深く関わって面倒をみているということだね。その点をまず、褒めてあげたいと思う」。この助言に、エルダーはハッとしたような表情を見せ、大きくうなずいた。「私たちがプリセプターに求めているものは、技術よりも精神的な支え。わからないことはベテランにふたらない。エルダーからは、私たちになんでも聞いて。私たちが上手に使った方がいいんだよ」と言ってあげてほしい」と。これを聞いたエルダー

できる限り定時に
仕事を終えること。

は、吉田の言葉に深く納得した。

この日、吉田は教育委員会の会議、ご家族との面会、カンファレンス、午後からのラウンドなど、スケジュールを次々とこなしていった。その間に北館2階A・B病棟を行き来し、元気のない表情の看護師や右往左往している新人看護師がいれば、気さくに声をかけ



てまわる。その積み重ねが、現場の人間関係を円滑にし、個々の前向きな気持ちを促している。

気がつく、午後4時30分を過ぎたところ。ここで吉田は精力的に動き出した。日勤の定時は午後5時30分。もちろん残業することもあるが、できるだけ早く仕事を終えさせるのが、吉田は師長の使命と考えている。忙しく立ち働く看護師一人ひとりに、「どの仕事が残っているの？」と声をかけ、

すすんで代行する。「みんな、朝からめいっばい働いているから、終業時刻というけじめを大切にしたいんです」と吉田は言う。働きやすい環境づくりも、看護師を長く育てていくための大事な要素。「時間や量」から「仕事の質や成果」へと、看護師の業務に対する評価も変わってきているようだ。

新人が自発的に学ぶために 開発された チェックリスト。

吉田が慌ただしく病棟を回っている頃、北館2階B病棟のナースステーションでは、担当の業務を終えたプリセプターの西田珠美が「チェックリスト」を広げていた。このリストは、新人が身につけるべき知識や技術を網羅した一覧表。西田は自己採点を終えると、プリセプターの赤穂奈々へ「よろしくお願いします」と提出した。赤穂はそのリストを確認し、翌日、西田へ返すようにしている。

「赤穂さんのコメントを読むと、注射の仕方一つとっても勉強になりますね」と西田は言う。チェックリストを活用することで、自分の得意・不得意がわかり、自発的に学ぼうという気持ちがわいてくるという。このチェックリストは、プリセプターだけ

でなく、病棟の先輩たちも情報共有する。例えば、あるプリセプティがカテテルを入れる処置を学んでいるという。すると、先輩看護師が意識して「今から、その処置をするから、一緒にやろうか」と声をかける。すなわち、チェックリストは本人が確認するだけではなく、新人にとって必要な看護技術を、偏りなくマスターできる仕組みでもあるのだ。

新人を導くだけでなく、 プリセプター自身も ひとまわり大きくなる。

プリセプターの赤穂は入職3年目で、西田と同じ看護専門学校出身だ。師長の吉田からプリセプターになることを打診されたとき、赤穂は入職当初、同じ出身校の先

ペガサスの看護06 在宅介護の現場から

病院から在宅への橋渡しの
重要性を感じ、
看護師からケアマネジャーへ。



ペガサスケアプランセンター忠岡
管理者 本高あみ子

私は馬場記念病院の急性期や療養期病棟の師長から、ケアマネジャーへと転向しました。師長当時、病棟での退院指導を通して、病院から在宅への橋渡しの重要性を実感。丁度その頃、新しくケアマネジャーという職種ができ、すぐにその資格を取得しました。

ケアマネジャーは、いろいろな職種の間に入って調整することが主な役割です。そんなとき、病院の看護師長としてチーム医療に携わり、調整役を担ってきたことが大変活かされているように感じますね。看護師の仕事は病院だけではなく、いろんなフィールドに広がっています。ペガサスでは、予防から、急性期、在宅まで、看護師として活躍できる場を提供しているのが、看護師として働く上で魅力の一つだと思います。

輩がプリセプターになってくれたことを思い出し、「私も同じように、身近な先輩になりたい」と喜んで引き受けた。吉田が依頼したのは「とにかく、何でも話せる先輩になってあげて」ということだった。日勤・夜勤の関係で、西田と一緒に勤務できないことも多いが、赤穂はメールのやりとりなどを通じ、精神的に支えている。「赤穂さんは一番相談できる人。地元の言葉で

話せるからほっとします」と西田は楽しそうに話す。吉田の狙い通り、二人はいい関係を育んでいるようだ。プリセプターになったことで、赤穂自身にも小さな変化が生まれた。西田の質問に即答できないこともあり、「家に帰ってから、看護専門書を聞く機会が増えた」ことだ。そんな赤穂の頑張りを、吉田は温かく見守っている。「みんなプリセ

「看護教育を支える立場から01」 副院長は語る

理論に基づく看護を、
愛の心で実践していくために。

馬場記念病院 副院長 (医療法人ペガサス 理事)
和田裕子

民間病院こそ 地域医療の基盤。

和田裕子副院長はこの4月、馬場記念病院看護部長から副院長に就任したばかりである。

そもそも、最初に和田が看護部

長として馬場記念病院に着任したのは、平成元年4月である。それまでの和田は、助産師として医療の世界に入り、看護師長を経て、大阪市の看護師教育ひとすじに歩んできた。それまで和田は自分がいた病院をふりかえってみると、「地域住民のためという言葉を病院関係者から耳にすることはあまり

プターになると、ひとまわり大きく成長しますね。新人を育てるとともに、プリセプター自身を育てる貴重な教育機会なんです」と言う。さて、北館2階B病棟では、あわただしかった日勤の業務が終わろうとしていた。「お疲れさまでした」と挨拶を交わした後、吉田もおもむろに帰り支度を始めた。家には、中学生と小学生の育ち盛りの息子たちが待っているのだ。子

育てしながら、確実に師長、統括師長へとキャリアアップを続ける吉田に、看護師という仕事の魅力を聞いてみた。「看護師は人間として磨かれる仕事。患者さまやご家族から学ぶことが多く、日々成長させていただいています。看護師だからできることってたくさんあるし、看護は楽しい仕事」ということを、後輩たちへ伝えていきたいですね」。



なかった」と言う。それが、この馬場記念病院では、いろんな患者さま、ご家族の声が耳に入ってくる。患者さまが求めることを直に聞き、それに応えていくことが本

当の医療の基盤ではないか、と和田は痛感した。地域医療を支えているのは民間病院なのである。看護部では民間病院こそ地域医療の基盤であるという考えが、みなに



確実に浸透している。

看護の世界は 科学的実践の現場。

専門職の場合、どんな先輩、上司と出会うかが、その後の人生に大きな影響を与える。看護部副部長の正

本恵子は「本質的な部分を外すことなく、理論や根拠に基づいた看護の重要性をここでは教えてくれます」と言う。

「思いつきの看護ではなく、なぜこれをするのか？理論性を持たなくては看護はできない」という考え方のもと、看護部では患者さまに接している。また、看護師一人

ひとりに必ず自分の看護観を持つようにも教育をしている。

それぞれが確固たる看護観を持たなければ主体的に看護に取り組めないからである。だが、ここでのいう看護観は机上の理論ではない。「看護観は実践するもの。立派な看護観を唱えるだけじゃ、だめなんです。看護の世界は、科学的実践の現場“だと考えています”」和田は強調する。

「出会いと愛と和」を 大切にしたい。

もう一方で看護部が大事にしているのが、愛の心であり、常々スタッフには、「温もりのある行き届いた看護をしなさい」と指導している。

例えば、病気に恐怖を感じている患者さまには、医師の説明がなかなか理解できないこともある。そんなとき看護師は「先生がこうおっしゃったから、こうなんですよ」と言うのでは、役目を果たしているとはいえない。少し手を添え、「大丈夫ですよ」という励ましを体温で伝えながら、患者さまが理解できるように、やさしく説明するのが看護師の役割なのである。

有能なスタッフを集め、 長く育てていきたい。

馬場記念病院の看護部の卒後教育は、看護学校の間でも定評がある。そのなかで特に力を入れてるのは人間教育である。

知識は本を読めば身に付くが、人間はそんな簡単に成長できない。だから、一人ひとりが信頼される看護師になるよう、人間教育に力を入れているのだ。

和田が副院長となった今も、教育にかける情熱は変わらない。

「これから有能なスタッフを集め、長く育てていく仕組みを作っていきたいですね。そして、患者さまやご家族、地域の人々から求められる病院、その求めに応じられる病院であり続けたいと考えています」と力強く語る。さらに、これから看護師を志す人に伝えたいことはという質問に、「自分の職業をまず愛するということ。そして、みんなが自分の選んだ仕事に自信を持って、素晴らしいと言えるよう、管理者が万全なサポートをしています」と言葉を重ねた。

「看護教育を支える立場から02」 看護部長は語る

働きやすい環境を整え、モチベーションの向上を。

馬場記念病院 看護部長

櫻井能武子



取り組むという気風がありますね」

安全安楽な看護技術の提供を第一に考えて。

看護師のみんなが
気持ち良く働けるように。

和田裕子副院長の就任に伴い、看護部長として招かれたのが、櫻井能武子である。櫻井は、大阪市の職員として看護の臨床と教育に携わり、定年後は大阪市立看護専門学校、副校長を3年間務めた後、馬場記念病院の看護部長に就任した。「24時間ベッドサイドにいるのが、看護師です。どんなときでも、万全な看護技術を提供できるように、現任教育の充実を一層図りたい」と抱負を語る。馬場記念病院における看護師教育についての評価はどうだろうか。「仕事が忙しくても、全員が集合研修に参加して、学ぶ時間を確保できるようにサポートしていることが素晴らしいです。看護部みんなで一所懸命、教育に

平均在院日数の短縮化が進むなか、看護師の負担はますます大きくなっている。そんななか、看護師が気持ち良く働ける環境づくりも大きなテーマだ。「看護師はケアの最終責任を担い、多くのリスクに直面します。そういうリスクの予防を組織的に考えることは、患者さまのためであると同時に、看護師のストレスを軽減し、モチベーションを上げる上でとても重要なのです」と言う。看護師一人ひとりの力を引き出し、やりがいを実感できるようにするにはどうすればよいか。櫻井は大きな視野で看護部全体を見渡し、さらにより良い看護部づくりをめざす。

「看護教育を支える立場から03」 シニアアドバイザーは語る

すべての看護師が長く勤めたいと思える病院に。

医療法人ペガサス 法人本部
看護管理部

山村壽美子



ります。そこで、正規配属の前に各部署をローテーションで経験してもらう工夫も必要です」。

適材適所の配置で
看護師の定着促進を。

より働きやすい勤務体系を
構築していきたい。

医療法人ペガサスの法人本部に属する看護管理部では、今年の4月から看護師の労働管理を調査・改善していく役職として、シニアアドバイザーを新設。そこに着任したのが、山村である。山村は大阪市立総合医療センターの看護部長を定年退職後、大阪市の非常勤嘱託・看護顧問として、看護師の募集・教育などに携わってきた。山村に課せられたテーマは、看護師の労働環境の改善である。この問題に対し、山村は二つの視点から解決策を見出そうとしている。「一つは、適材適所の配置。例えば、中途採用の場合、経験が活かされない部署にいきなり配属されると、ついていけない」と感じることがあ

もう一つは、勤務体制だと言う。「この病院では、ママさんナースが多く働いています。保育や学童のサポート体制は充実していますが、さらに個々のライフスタイルに応じたフレックスタイムの勤務体系ができないか、関係部署と相談しているところです」。こうした人事的な施策と同時に重要なのは、看護師が長く勤めたいと思える風土づくりだと山村は言う。「ゆくゆくは、現任教育の充実や中途採用者の研修など、いろいろお手伝いしたいですね」と意欲をみせる。

「看護教育を支える立場から04」院長は語る

専門職教育と職員教育の両輪で、 地域医療に貢献する 看護師を育てていく。

馬場記念病院 院長（医療法人ペガサス 理事長）
馬場武彦

大きなビジョンを理解する ペガサス全体研修。

看護師教育を後方から支援しているのが、馬場記念病院・院長の馬場武彦である。馬場は看護部の教育体系について、どのように考えているか。「専門職業人を育てる教育として、かなり充実した内容だと評価しています。特に良いところは、看護部のなかで、現場の声を吸い上げながら作り上げている点ですね。トップダウンではなく、ボトムアップで改善を重ねているからこそ、より実践的な内容になっているんだと思います」。

馬場記念病院では、看護師に代表される専門職教育と並んで、職員全体の研修にも力を注いでいる。

年度始めには、「医療法人ペガサス全体研修」のプログラムが作成され、月1回のペースで全体研修が開催されているのだ。この狙いについて、馬場はこう語る。「専門職としての技術向上だけではなく、ペガサス職員としての意識を高めることが重要だと考えています。地域医療支援病院として当院は何を期待されているか、DPC対象病院として何をめざしていくか。そういう大きなビジョンを理解すること、個々の職員が明確な判断基準を持って行動できるようにすると考えています」。

専門職としての高度な技術と、ペガサス職員としての高い意識。その二つを養うことで、人材の質を引き上げ、医療・看護の質を高め、ひいては顧客満足を高めていくというのが馬場の考えである。

人材教育をさらに強化し、 医療の質的向上をめざす。

教育の一環として、馬場自身が職員の声を聞く機会も意識して設けている。例えば馬場記念病院には、新人たちの不安や悩みに応える「メンター制度」というユニークな制度がある。これは、いろいろな職種すべての新入職者から構成される5〜6人ずつのグループに、先輩職員1名がメンター（経験を積んだ先輩職員）として参加

し、必要に応じて、メンタルなケアを行うもの。ときには食事しながらざっくばらんに語り、お互いの悩みを打ち明け合う。この席に、馬場も積極的に参加しているのだという。トップであつても新人と膝を交えて話し合う。こんなオープンな姿勢が、風通しのいい風土づくりに役立っている。

人を育てることで、よりいっそう患者さまに選ばれる病院をめざしていく。馬場の言葉には、職員教育に対する強い意欲が込められていた。



Pegasus Tsubasa

special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、そして、看護、介護に関連する事業所と、連携を行っています。診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。special 2 では、こうした診療所、事業所をご紹介します。

※ 診療所(アイウエオ順)そして事業所の順でご紹介しています。

近

隣の医療・福祉スタッフ、患者さまのご家族との密な連携で、在宅医療の質を高める。

診療所

患者さま・ご家族の視点を重視した医療をめざす。

● 日常の健康管理から緊急時の対応まで
一手に引き受ける。



三浦クリニックは泉大津市の南海松ノ浜駅から徒歩5分、国道に面した場所に位置する。今回お話を伺った副院長の三浦浩介氏は、近畿大学堺病院に長年勤務した後、父親で院長の三浦篤典氏が経営する同クリニックに医師としての活動の場を移し、日夜診療を行っている。副院長は勤務医時代より、在宅医療への深い関心を持っていた。当時、担当した患者さまの退院後、患者さまの病状や患者さまのご家族の様子などが気がかりではあったが、日常業務の繁忙さから、改めて患者さまと接点を持つことは困難だった。そうした経験から、開業医になったら積極的に在宅医療に取り組み、患者さまやご家族がよりよく生活ができるように退院後も支えていきたいと考えていたという。

現在副院長は、毎日午後4時から訪問診療に出かける。主に筋縮性側索硬化症(ALS)等の難病患者さまであり、また胃ろうを造設されている方

や気管切開で呼吸器を装着されている方など、通院が困難な患者さまを定期的に訪問し、病状の安定化や健康管理を行っている。また、在宅における医療機器のトラブルの対処についても、勤務医時代に十分なトレーニングを行ってきたため、患者さまに異変が起きた場合には、ご家族から副院長の元へすぐに連絡が入るほど信頼も厚い。「胃ろうのチューブが外れた、など自分では対応できるトラブルは、できる限り私の方で行うようにしています」。こうした実質的には24時間体制で、地域の患者さまの健康を見守っている。

● 在宅医療の
未完成な部分を、
病診連携で補う。

在宅療養を望む患者さまのご家族は、「何としてでも自宅で、ストレスなく療養してもらいたい」という気持ち強い、と副院長は語る。その思い



三浦クリニック

院長：三浦 篤典 副院長：三浦 浩介
住所：泉大津市松之浜町2-2-8
TEL：0725-21-6081
診療科：内科、神経内科、
リハビリテーション科、産婦人科、外科

に應えるためにも、地元の医療施設・福祉施設間のネットワークづくりは欠かせない。三浦クリニックでは訪問看護ステーションも併設しているが、それだけでなく、ペガサス訪問看護ステーション忠岡をはじめ、近隣の医療機関や在宅サービス機関とも密に連絡を取り合い、きめ細かな連携体制を敷いている。

往診を続けるなかで、ご家族との信頼関係も深まり、介護疲れの悩みや慶弔等で家を空けねばならないといった相談も受ける。こんなとき、ショートステイでは対応が難しい呼吸器や医療機器を装着した患者さまの場合、「レスパイト入院」を利用できればいいのだが、現状としてはなかなか厳しい状況にあると言う。また、ご高齢の患者さまが再入院する際も同様で、特に難病である場合は受け入れ先が限られてくるといった問題も発生している。病院が地域医療を支援する上で、今後、重要なテーマになるだろうと副院長は考えている。「切れ目のない医療のた

めにも、患者さまの病状、生活等の諸情報をもっとスムーズにやり取りできる環境づくりも必要ですね」。

馬場記念病院との関わりとしては、以前、他の病院からの紹介で往診していた患者さまの容態が急変したとき、馬場記念病院が早急に対応し、

時流に即した 新たな取り組みを生かして。

● 心と体の両面から、
患者さまを
手助けする。

山尾内科クリニックは、南海高野線初芝駅から徒歩5分の場所に位置する、親子2代で続くかかりつけ医。院長の山尾卓司氏は、神戸大学医学部を卒業後、そのまま母校で研究生生活を送り、平成5年には熊本大学へ国内留学をするなど、糖尿病・がん関連遺伝子の研究を続けながら、兵庫県立病院や民間病院で臨床活動を行っていた。そのため多忙で、平成12年に父親が他界したときも即座に今の診療所を継げなかったという。「父親の死去から3年間のブランクを作ってしまったので、その間に、大リフォームを施すことにしました」。まずは玄関から待

医 学的な知識をふまえた癒しを
通じて、地域の健康を支える。

診療所

受け入れてくれたことを今でも覚えているという。「患者さまとそのご家族が安心して、在宅療養でき、またこちらでも何かあったときに、受け入れてくれる病院があれば、在宅医療に安心して専念できますから」と、その思いを語ってくれた。



合室まで車椅子の方でも楽に入れるよう、入口の位置を変えた。トイレも車椅子の方の出入りを考えて間口を広く取り、内部で旋回できる余裕を持たせた。廊下では手すりを使う方と車椅子の方がすれ違える幅にした。このようにして、入口から一番奥の診察室まで段差をなくし、車椅子のまま行けるようになった。この徹底したバリアフリー化が評価され、平成17年度の「大阪・心ふれあうまちづくり賞」奨励賞を受賞した。

今までの経験を通じて、「内科を受診される方の中には、心の問題を抱

えている方が非常に多い」ということに気づく。そのため、薬を処方するだけでなく、希望される患者さまにはカウンセリングやマッサージといったリラクゼーション効果やストレス解消効果の高い方法も積極的に取り入れているという。今後も、アロマテラピーの有資格者をスタッフに迎えるといった、新たな試みにも余念がない。

● 長く付き合える
かかりつけ医として、
健康の指南役を務める。

古くから住んでいる方が多い土地柄か、父親の代から通われている患者さまが多い。「親子3世代ずっと診ているご家族もいて、ケガをしたお孫さん連れでいらつしゃる、ご年配の方もおられます」。午前は主に高齢の方、午後は会社勤めの方が多いという。以前は、近年増加している生活習慣病をテーマとした「健康教室」を月1回、診療所で開催していた。働いている方でも参加しやすいように、土曜の午後に時間を設定、実際は働き盛りの方の参加はなかなか難しくはあったが、そのご家族が熱心に通ってくださっていた、と語る。現在では、生活習慣病で通われる患者さまには、専属の管理栄養士が個々の病状に合わせて、個別の食事指導を行っている。

こ山尾内科クリニックのある場所から馬場記念病院までは、堺市内では決して近いとはいえないのだが、院長

が後を継いでから、登録医となったという。「以前から、馬場記念病院が脳神経疾患の治療に力を入れていることは注目していました」と院長。これ以外にも、以前堺東警察署の警察医を担当していたとき、馬場記念病院のスタッフとは一緒に仕事をする機会もあったという。またここ最近では、馬場記念病院からの紹介で、脳腫瘍のうえ糖尿病のコントロールも必要な患者さまの訪問診療を行ったという。「今後は脳神経

疾患の患者さまを中心にお世話になるケースも増えるかも知れませんね」。



山尾内科クリニック

院長：山尾 卓司
住所：堺市東区野尻町525
TEL：072-285-0018
診療科：内科、消化器科

地 元の人々との絆をもとに、 介護支援の輪を広げる。

事業所

地域への感謝を込めて、
介護サービスを提供。

● 長年培ってきた
信頼感が、
仕事の支えになる。

JR上野芝駅近くの商店が軒を連ねる界隈の真ん中にあるタイヨウビジネスは、介護支援事業を始めて今年で7年目になる。代表取締役の水野千代子氏は昭和42年、北野田にて会社を立ち上げ、その後、中百舌鳥等に支店を構えた。昭和47年、これらの会社を統合し、現在の上野芝にて寝具・下着の小売業をご主人と開業。その後ご主人は亡くなられたが「タイヨウ」という名



前だけはこのままで」という遺志を継いでこの屋号を守ってきた。当時、近くに整骨院がオープンし、お店の前を多くの高齢者が通るようになった。最初は挨拶を交わすだけだったが、次第に通院後や診療の待ち時間の間に立ち寄る方々が増え、お店はいっしょに集いの場になっていった。このとき、介護の下着の相談を受けたことがきっかけで、現在の仕事にも繋がっていく。

また水野氏は仕事の傍ら、長年ボランティアを続けてきたが、この活動を通じて知り合った介護福祉施設の関係者の勧めもあって平成12年、介護支援事業所への転換をはかった。現在のスタッフは登録ヘルパーを含めると38名。うち介護福祉士や介護支援専門員の資格を持った10名が常駐。介護タクシーの免許も5名が取得している。現在は介護の必要な方や障害者が通所、入院など自由な形で利用できる「小規模・多機能サービス」への参入をめざし、すでにNPO法人「タイヨウの家」の認可を受けた。

● 介護を通じて、
心のつながりを
育てていく。

「地元の方々から家族共々支えていただいたことに感謝したくて」と水野氏。これといつて営業活動は行っていないが、地域の方やお知り合いの方の間で、口コミで伝わり、徐々に忙しくなってきた、という。そういったなかで、さまざまな環境下にある高齢の方に出会う。数年前、40年来の顔見知りで、99歳という高齢の方のお世話をする機会に恵まれた。その方のかかりつけ医と情報交換をし合い、訪問介護を続けていたが、昨年お亡くなりになり、ご家族と共に最期を看取った。「介護という仕事を越えて、心のつながりを築くことができました」。そ



有限会社タイヨウビジネス

代表取締役：水野 千代子
住所：堺市西区上野芝向ヶ丘町1-2-18
TEL：072-279-1939

事業内容：介護支援事業所、訪問介護、福祉用具貸与、特定福祉用具販売

の一方で、子供と疎遠になったり、認知症等で生活保護や介護の申請ができない、いわゆる「介護難民」の高齢の方と出会うことも多い。「そういった方が十分な介護が受けられるように、あちこち駆け回ることも多いですね」。

馬場記念病院とのつながりは2年前、ご近所の方が馬場記念病院に入院した際、その患者さまについての要望で、主治医から支援を要請されたことがきっかけ。以後、ペガサスケアプランセンターからの紹介で訪問介護を請け負うこともあると言う。また、水野氏本人がご利用者の付き添いで馬場記念病院に向くことも多い。「高齢の方は診察を待っている間に、気分を悪くされることが多いのですが、そういう方を馬場記念病院では後回しせず対処してくださいませ」。

今後馬場地域の救急病院として馬場記念病院に期待を寄せる水野氏。「質の高い救急医療はもちろん、高齢の方が入院するときは、できる限り対応していただければ」と、締めくくった。

医療が変わります。 ペガサスも変わります。

地域医療を取り巻く環境は、変わり続けています。その変化を見つめて、ペガサスでは、馬場記念病院を中心に、さまざまな取り組みを行っています。その取り組みの目的や方向性、また、皆さまにご理解いただきたい点をお伝えします。



馬場記念病院は 医師による看護師教育を 行っています。

馬場記念病院は、看護部による看護師教育とは別に、病院としてもその教育に力を注いでおり、その一環として、医師による「ACLS」※1参照の勉強会を毎月1回行っています。「ACLS」とは、医療従事者のみができる、科学的な根拠に基づき統一された一連の救急医療行為のことで、この技術を身につけることは、急性期病院で働く看護師にとって重要な、「患者さまの病状を的確に把握し、それに合った処置を迅速かつ冷静に行うこと」の更なる向上となります。しかし、「ACLS」は、救急医療現場で働く医師や看護師は熟知しています。が、一般病棟や、学生時代に学ぶ機会が乏しかった看護師には、あまり浸透していません。そこで、当院の救急部部長であり、脳神経外科副部長宇野淳二医師を講師として、救急外来の紀ノ岡真弓師長がそのアシスタントを勤め、一般病棟、

慢性期病棟の看護師を中心に、看護部内における「ACLS」浸透のための勉強会を開催するようになりました。

勉強会では、人工呼吸、気道確保、バグバルブマスクを用いた人工呼吸法、心臓マッサージなどの「BLS」※1参照を復習することから始めます。「BLS」の確かな技術があるからこそ、「BLS」から「ACLS」へとスムーズな救急治療連携が可能となり、患者さまの急変に対して、迅速で的確な対応ができるようになるからです。また、近年の「AED」※2参照の普及に伴い、その使用方法も看護師の基礎の一つとして身につけるようにしています。

「ACLS」を 看護師に浸透させることの 意味。

救急・急性期医療を主とする馬場記念病院では、すべての看護師に、その専門職としての基礎として、「ACLS」を知っておくべきという考えがあります。なぜなら、患者さまの多様な病状に対する観察・判断に、的確で迅速な処置が求められる急性期医療にお

いて、看護師が救急救命処置の知識と技術を身につけることは、それに対応するために必要不可欠だからです。また、看護師全体に救急救命処置を浸透させることで、医師個人による一方的な主導ではなく、医師も看護師も同じ意識・技術をもったチームとしての医療活動ができるようになります。このことにより、当院の医療事故防止、緊急事態への対応力の更なる向上にも繋がっていきます。今後も馬場記念病院では「ACLS」の更なる普及、啓発のため、継続的に勉強会を開催し、看護師一人ひとりが誇りをもって仕事ができるよう、

たゆまない努力を重ねていきます。

※1 BLS（一次救命処置）とACLS（二次救命処置）

BLSは、主に一般市民が行う心肺蘇生法で、特別な機器を用いることなく、呼吸、脈の確認、心臓マッサージ、人工呼吸、体位変換を行う技術のこと。ACLSはBLSに除細動、気管挿管、薬剤投与といった医療行為が加わったもので、医療従事者を対象とし、2004年度より医師の卒後臨床研修の必須化が始まっている。

※2 AED（自動体外式除細動器）

電気ショックを与え、心臓の動きを戻すことを試みる医療機器で、2004年7月厚生労働省から講習を受けた一般市民の使用が認められ、駅や空港、オフィスビルなど、人の大勢集まる場所などにAEDの設置が普及している。

地域医療を考えるペガサス情報誌



2007年夏号
平成19年7月発行第7巻第1号（通巻25号）

発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
編集協力 HIPコーポレーション
発行 医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

本誌は再生紙100%を使用しています。

special
1

人を育て、人とともに、
地域医療の明日を創る。
第1弾 ― 看護師教育にかける思い ―

special
2

医療から、そして看護、介護から。
地域社会を支える人々。

※記事の制作にあたり、患者さまや診療所の先生方、事業所の方々にご協力いただき、心から御礼申し上げます。



医療の高度化が速いスピードで進む今日、
医師や看護師をはじめとするすべての医療人は、
自らの知識・技術の研鑽に、日々、努力を重ね続けています。
その医療人のなかで、今回の『つばさ』では、
ペガサスにおける看護師教育に焦点を当てました。

看護師は、患者さまにとって、ある意味、一番身近な存在です。

専門的な知識が深ければ深いほど、また、技術が高ければ高いほど、
患者さまは、大きな安心をお寄せくださるでしょう。

しかし、それだけでは足りないといふペガサスは考えます。

豊かな人間性。

社会や医療の変化を、正確に捉える眼。

そのうえで、自分の家族に対するような看護――。

それができてこそ、

患者さまから真の信頼を、いただけるのではないのでしょうか。

全国的に、民間病院での看護師不足が取り沙汰される今、

ペガサスの看護師は、ひとりペガサスだけの看護師ではありません。

地域の、そして地域医療全体の「資産」です。

一人でも多くの看護師がこの地域に集まり、

患者さまにより良い看護をご提供したいと望むことができるよう、

ペガサスはこれからも、

看護師教育のあり方を追求し続けていきます。

医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦



医療法人

ペガサス